

## 「2025 年度東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学研究科 修士 2 年 松平光

本年度の東アジアワークショップに TA として参加させていただいた。私がこのワークショップに参加させていただくのは前年の京都に引き続き、二度目であった。

今回はゲストとして台湾国立大学のみなさまに迎え入れていただき、大変素晴らしい滞在となった。

印象的なのは、それぞれの大学ごとの研究内容やアプローチの差異である。台湾国立大学の学生たちの多くが性的マイノリティや政治運動をはじめとする社会運動についての研究を行っていたし、韓国の発表者たちは計量的な研究が多かった。それぞれの国や大学の状況や雰囲気を反映させている様子で、同じ社会学とひとくくりに言ってみても、それぞれの置かれている状況によってアプローチや対象が全く変わってくるということは、このような交流の場があることで初めて感じ取ることができることだろう。

台湾国立大の学生を中心に準備していただいたフィールドトリップも大変充実したものだった。台湾における歴史、政治、さまざまなマイノリティの置かれている状況について、緻密に準備されたコースをたどりながら、学生が街を案内してくれる。また、台湾国立大学のコネクションを用いて、立法院の議員や様々な NPO 団体にもお話を伺うことができ、5 日間の日程ながら、普通の旅行では感じることのできない台湾社会の一端を垣間見ることができたように感じた。

今回は TA として参加しつつも、わたしも発表させていただいた。このワークショップは、初めての英語発表の場として最適である。いきなり国際学会で発表するのはかなりハードルが高いが、クロードな場でじっくり時間をかけて発表を準備し、気心の知れたメンバーの前で自分の発表をすることができる。質問も好意的なものばかりだし、英語が拙くても聴衆はしっかりと聞こうとしてくれる。研究者を志すにせよ、就職するにせよ、英語で発表するような機会が一般的に増えている中で、一度でも英語で研究発表をした経験は必ず今後の人生で生きてくるだろう。

また 5 日間の日程を通して、台湾や韓国の学生たちと仲良くなれるのもうれしい。私も帰国後に多くの学生たちと連絡を取り合っているし、人によってはここで知り合った学生とそれぞれの国で再開したりしている。また、同じ京大からのメンバーともとても仲良くなった。今年のメンバーは本当に素晴らしい人たちで、皆研究に熱心で、思慮深く、アクティブだった。実際のところ、綿密な発表準備を行うためほかの授業に比べれば労力がかかるが、その過程の中でメンバーと仲良くなるし、現地でもワークショップ外の時間にみんなで遊びに行くのも楽しい。このワークショップは友人作りにも最適なのである。

というわけで、このワークショップは大変実りの多いものであった。多くの学生に強くおすすめし

たい。

この場を借りて、このような貴重な機会に参加させていただいたことに感謝申し上げるとともに、担当教員として準備に奔走されていたハイム先生、随行して下さった安里先生、事務手続き等大変な役割を担っていただいていた野澤さん、研究室の長谷川さん、素晴らしい京大の参加メンバーたち、そしてホストとして歓待してくれた台湾国立大学の人たち、そして東アジアジュニアワークショップに参加されたすべての人に感謝を申し上げたい。